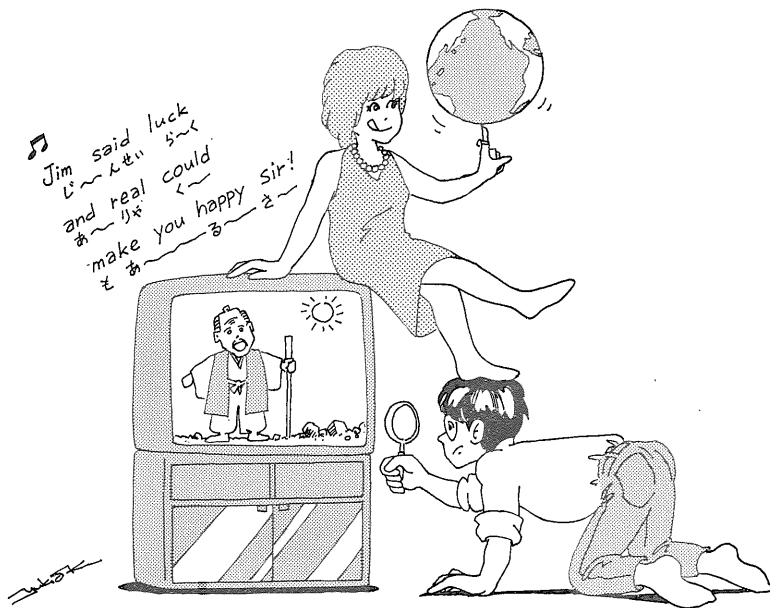


旅は未知ずら、夜はなあ……………酒!

(アメリカ地質学会 100 周年記念大会巡検記)

脇田 浩二 (地質部)
Koji WAKITA



<プロローグ>

「さあ このひきがえるのステーキの値段をあていただきます! ハウマッチ? 1デベソは 30円です。」とTVでは今日も世界中の映像が流れている。隣ではアメリカン・ポテトチップをほおぼり「あらあそこはほら 学生の時に行った通りだわ。なんて言ったかしら? そうだわ オーシャンデリヤ通りだわ!」などと私とかつて結婚式をあげたことのある女性がつぶやいている。私は おもしろくないので 部屋の隅っからリモコンで「えいっ」とチャンネルを変えた。

「じんせい 楽ありゃ苦もあるさあ……………」と長年聞きなれたテーマソングとともに 見なれた風景が飛び込んでくる。「あっ! あれは俺が調べた所だ。みろみろ 助さんの座った石 ハンマーで欠けてやんの! ハハハ」と大口をあけて笑ってた所にとつぜん「いやあ まいったなあ たけしがついに世界一周!」と元の番組へ戻されてしまった。「こりゃ! なにをやる。あの石は二疊紀の石灰岩だったんだぞ! せっかく説明してやろうと思っていたのに!」とどなる。

「なにが助さんよ。 助平さんのくせに…。 どうしてあなたは時代劇とか サスペンス劇場あずさ 120号殺人事件とか ローカルな番組しか見ないの。 このあいだだって サスペンスもので刑事がロスに飛んだとたん トイレに飛び込んで おーい 犯人と刑事は日本に戻ったか? って聞いてたじゃない。 『ロシア秘宝の旅』とか 世界のいろいろな地域を紹介した番組ってのいいじゃない ♪」

「楽しいわけないだろう。 あそこに行った あそこは良かったと言われると不愉快千万。 その点 水戸黄門はいい。 自分の行ったとこだけ TVに映るからな。 最高だよーん」

このように外国コンプレックスがすっかり骨の髄まで浸み渡ってしまっている。 1年に80日以上も日本のあちこちを旅したり 調査していると足の先から頭のとっぺんまで日本人で 地質も日本のことしか頭に入っていない。 コルディレラなどは 何かの雑菌かと思ったり アパラチアはアパッチの首長がはじめたお店の名前だなどと思い勘違いしていた。 そんな人間がある日突然デンバーで開かれるアメリカの地質学会 100 周年記念大会

(1988)に参加することになった。さて 旅の顛末や
いかに！

<デパーチャー>

成田空港は夜でも賑やかだ。中でも賑やかにしているのが私で もう日本語の使い納めだと思うと 声帯がうち震え 「あの～ どうやったら アメリカに行けるんでしょうか？」と United の日本人職員に日本語で聞いてまわった。とくに Estwing のハンマーには困ったもので まさか 手荷物として持込んで 私は geologist で 日本赤軍ではありません と説明し続けるわけにもいかない。アメリカ製なので税関で申告してゆかなくてはならない。かくして 税関と搭乗手続との間を 汗をかきかき駆け廻るはめになる。(ハンマーは日本製をもっていこう！)

さて 機中の人になると早速 時差ぼけ対策をはじめると「なあんだ。日本にいて仕事しているときとおなじで アメリカでもポケーとしてただけだったのか 国際的なポケー人間だな」と烙印を押されてしまう。ぼくは眠らないように眠らないように ひつじが一匹とばなかった ひつじが二匹とばなかったと数えながらがんばった。これが効を奏してか しすぎてか 結局その日は3時間しか眠れず これがその後何日もの習慣になってしまったのであった。

<ナイストーマーチャー アメリカ！>

ロスに着いた。ああ私も三浦さんと同じところまできてしまったと感慨にひたる間もなく デンバーへの飛行機に飛びのった。United の国際線から国内線へと乗り換える。飛行機が飛びたった。そしてここから 私のアメリカが始まった。幸いにも私は窓ぎわ(将来の指定席とうわさされているが…)に座ることができた。ちょっと窓から一瞥した。そこは アメリカ西岸の海岸山脈だった。ここには 私が日本で扱っているのと同じような disrupted terrane つまり ごちゃごちゃした岩石のごみばこ(地質ニュース 365 号を参照のこと =宣伝)が分布している。とつてもマツダのファミリア～！

しかしこの感慨は次の瞬間から絶望に変わった。アメリカがその真実の姿を現わしたからである。そこは砂漠であり 地層の露出は悪い。しかし確かなことは 地層がほとんど変形していないことである。グランドキャニオンを通るころには 地層はその壮大な姿を赤い反射の中に浮び上がらせていた。こっ これがアメリ

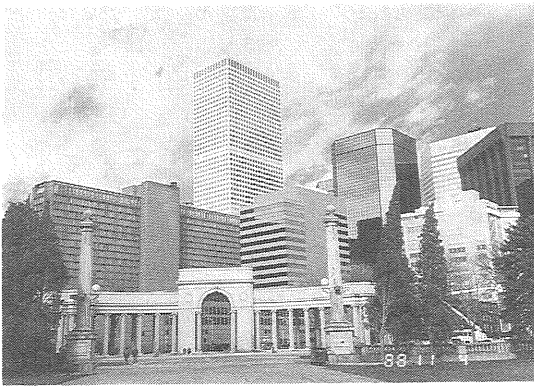
カかぁーと 声にもならないかすれた声でつぶやきながら ひたすらシャッターを押していた。繰り返されるシャッターの音の中で これから向かうアメリカの学会の姿が髣髴としてきた。しまった！ 私はアメリカなんかに来るんじゃないかった。アメリカでは 私は日本の片隅で geology (地質学) をやっていますなんて 口がさけてもいうまい。学会についたら 「ワタシ ニッポンのカメラマン アメリカ ビューティフルネジオロジストタイヘンネ ゴクロハン！」と喋ってごまかそう。と固く心に誓った。

それは 私にとって親しみやすい 日本の地質体の大部分を占める disrupted terrane がアメリカ西岸のごく極所に限られており アメリカ大陸の大部分が そんなものとは無関係な 先カンブリア紀の変成岩・深成岩と その上に整然と重なる古生代から新生代の地層からなることへの実感であった。それらの穏やかな構造 そして巨大な河川と 大量の土砂 この中で geology が論じられ 鉱床学が発展し 応用地質学が語られてきている。私が 私たちが日本でやってきたことは何だったんだろう。もしかして孫悟空がお釈迦さまの掌の中で暴れていたように geology の y のしっぽのあたりで ハンマーをふるっていたのではないだろうかと 悲しい気持ちになっていた。

この blue な気持ちとは反対にこの気持を形に残そうと シャッターを切る指は動き続けた。隣に座って私を不思議そうに見守っているおばさんに「いやぁ アメリカって インタレストィングですなあ。ジオロジストなんですよ スパイじゃありません。ホントに。いやぁおもしろい。ハハハ…」なんて言訳してみたが 英語が本当に通じているのか確かめるだけのゆとりは私にはなかった。

<デンバー コロラド>

デンバーに着いたのはもう夕方遅く すぐホテルへ向かった。タクシーは高かったり ボラレたり という心配があったので 荷物を受取ったとき 何に乗って行ったらいいかたずねた。そこでバスで行くといいわれたので 教わったとおりにバス停に向って行くと 黒人の太っちょのおじさんがホテルの行き先ごとにバスを割りふっている。ここで待てという その笑顔がとっても素敵で アメリカの夜はこわいような気がしていたけど その笑顔だけでとってもうれしくなってきた。しばらくして来たバスは バスといっても小型のワゴン車で driver は若い女性。ぎょっとしながら ラッキーと思ったが あとで聞いたらラッキーでなく この手



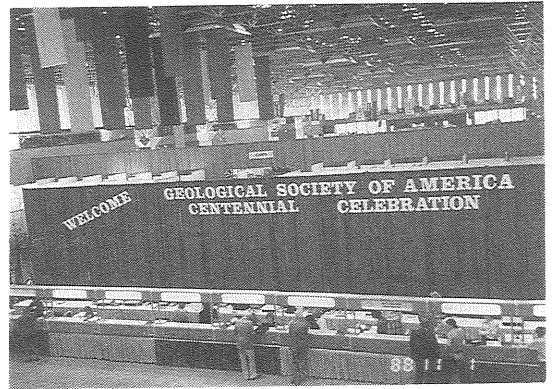
第1図 デンバー市街地(ダウントウン)

の職場に若い女性はよく進出しているような。でもそれだけで気分はリムジンであった。

デンバーでは(アメリカの他の都市は知らないが日本と比べて)ダウントウンと周囲のゴーストタウンとのコントラストにとても強い印象を受けた。翌朝は3時間睡眠のあと早朝から起きてホテルの窓からシティーウォッチングをした。朝やけに輝くダウントウンのビルディングを眺めていると日本でも同じ風景はありうるなと理性で理解しつつも心は高ぶり私にとってそこはまぎれもなく異国であった。

「アメリカはこわいぞう」と脅かすいやな奴が地質調査所にはごまんといって私は出かける前から神さま仏さま観音さまに菩薩さまどなたでもよいですからお守りくださいとお祈りしてきたうえホテルも安全を考え身分不相応な立派なホテルにした。折りからの円高で高くはないがととても rich であった。ホテルの朝食これはもう貧乏人にとって戦場です。“バイキング”“食べ放題”……なんてすてきな響きなんだろう。モーツァルトもこんな美しい響きの曲は作れないしリルケもこんな響きの詩は作れまい。ジュースを三杯飲んだ。これはやたらと喉が渇くからである。次いでパンを三切れ食べた。これはお腹を整えるためである。スクランブルエッグをお皿一杯に盛った。最初に立った所にあったからである。ソーセージハムサラダにフルーツおや? ドーナツもあるぞ……。そうこうするうちに気持ちが悪くなってきた。後悔は決して先には立たない。部屋に戻ってしばらくベッドにじっとしていた。

そうだ学会に来たんだ。血液が胃袋から頭の細胞の一部に回ってきたとき私は思い出した。学会では巡回バスも出していて我がホテルにも迎えにくる。こわいアメリカを吹き込まれた身としてはこのバスに乗って会場とホテルと往復しそれ以外は一歩たりと



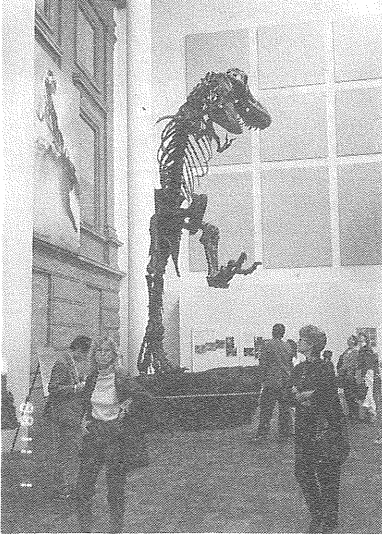
第2図 アメリカ地質学会受付(Currihan Exhibition Hall)

も出るものかと心に固く誓っていた。早速このバスでメイン会場に向かった。会場にはアメリカ地質学会100周年大会と大きく書かれていた。メイン会場の入口付近で受付を済ませるといろいろな資料を渡された。やっぱりみんな英語で書かれている。少し嘆息してプログラムを眺め本日のメインイベントシンポジウム会場へと足を運んだ。ウァーすごい人。まず目につくのは若い女性。いや私がスケーパーなのではありません。日本の学会と比べてずーと女性が多いのです。このことはアメリカ留学中の鎌田浩毅氏(地殻熱部)がアメリカの地質教室における女子学生の多さを説明してくれて納得しました。やっぱり私は助平ではなかった。ともあれ女性が多い。次に多いのが敬老バス所有者ないし超高齢者の男性。これは100周年大会という今回の特殊事情によるものと解釈している。

会場に入ったとたんすぐに日本人にあって感激した。時差ボケですっかりやつれた鈴木祐一郎氏(燃料資源部)である。鈴木氏は日本を出発してすぐpre巡検に行ってからそしてこの学会に来たのだが時差ボケのまま山を歩いたせいかすっかり放心状態で「私はpost巡検でよかった。こりゃ私も当分おとなしくしていよう」と思った。(国際学会はpost巡検にしましょう)

シンポジウム北アメリカの地質学の総括別・分野別に行われた。顕生時代の地質の話のうち私の印象は機内から見おろしたアメリカそのもので平坦な地層単純な層相を連想させるものだった。ところが先カンブリア系の総括でアメリカの印象が一変し心が躍った。

そこではメランジやオフィオライトが語られ付加過程が論じられている。日本そのものなのだ。この談話の中でもアメリカ西岸や環太平洋をモデルに先カンブリア紀のテクトニクスと考えようという姿が語られ



第3図 恐竜骨格 (デンバー自然史博物館)

ている。あのアメリカ大陸のごく一部でしかないアメリカ西海岸の狭い *disrupted terrane* やちっこい日本の *geology* がアメリカの大部分を占める先カンブリア紀の範となりうる。このことは機中からアメリカを見ていて失望していたこの視野の狭い日本人 *geologist* に大きな希望を与えた。

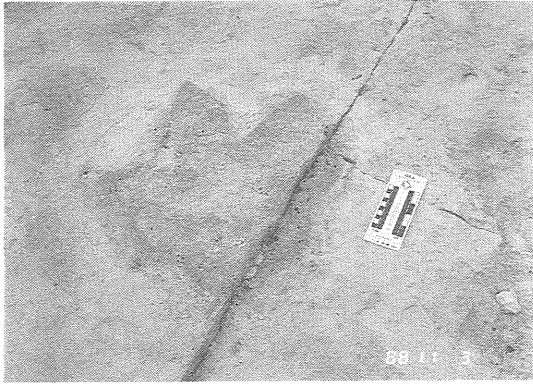
てなわけで 生きる希望の沸いた私は急におなががすいてきてシンポジウムがすむやいなや街に出た。ルンルン アメリカもなかなかいい街だわいとすっかり *high* な気分で スキップスキップホイホイホイと食堂を求めた。この時は怖いアメリカでは決して外は歩かないという決意をすっかり忘れてしまっていた。さすがに「めし」という暖簾はなく しかたなくハンバーガーショップなるものへ行って 長い列の後へ並んだ。順番が来て はたと困った。どう注文していいかわからない。ううっとううなっているうち 「前の人といっしょ！」と指をさして食べたくもないものを注文していた。しかし 前の人と同じだけ払えばいいので 支払いはい簡単だった。

その日から あちこちの会場で講演が行われたが 距離の離れたいくつかのホテルとホールが会場 それらの間をバスが連絡している。バスも3コースあって 間違っただけに乗ると大変な目にあう。次の会場に行くのに2つのバスを乗り継ぐなんてことも起る。ホテルの中も大変複雑で いろいろな所に会場が分れている。ホテルは平屋ではなくて 高層と相場が決まっている。したがってエレベーターにのる。ところが会場はマジェスティック *floor* のマジェスティックボール room だったりして 上に行ったらいいのか下に行ったら

いいのかわからない。しかたがないので フロントに聞くとまっすぐ行って 一階降りて 右に折れ 三階上がって振り向いて 一回廻ってワンと言う といった具合に 複雑怪奇なことを平気で英語で話したりする。言われた(言われたと思った) 通りに行くと 何故かギャラリーだったりする。そこから 007 なみの苦労を重ねてフロントに戻り 「バックヤロー こっちとら自慢じゃないが英語がよくわかんねえんでえ なんとかしろ」と小声でどなったら 地図を渡してくれた。最初からこうしてくれりゃいいのに と思って地図を頼りに行くとそこはレストラン。もう駄目だと思ったら 後ろの方で声がかして そこが会場だった。てなことしているから なかなか会場にたどり着かない。もうしかたがないので これと決めた会場を半日動かないことにした。この決心が効を奏して いくつかのテーマセッションへ参加することができた。英語はいつもその快いリズムで眠気を誘う。時差ボケが重なっているからなおさらだ。高校時代なら 「こらあ。わきたあ！ きさま また寝とるなあ！ 外へたつとれ！」と Σ ベストで頭を殴ってくれる心優しい先生方がいたが アメリカは個人主義の国 よだれをたらしてぐうすか寝ていても誰も起こしてくれない。必死で聞いた。

4日間英語ばかり聞いていられないので 半日は野外巡検に行くよう心がけた。さすが 日頃野外地質家(通称図幅屋)としてこき使われているだけあって *field* へ出ると生き生きしてくる。冬に片足突っ込んだデンバーにはロッキーの少し冷たい風がそっと運ばれてきている。晩秋の褐色を主体としたシックな装いがそっと私を包んでくれて心地よい。

はじめに訪ねたのは デンバー郊外で恐竜の骨と足跡を産するモリソン層だ。最初の露頭は恐竜の足跡というが ただ地層がへこんでいるだけだ。「こんなもんタービダイトの底痕のおぼけだぞ」と思ったが 全体は全くそんなものがない所に突然へこんでいるので 恐竜の足跡しかないということだ。全く単純な論証だと思ったが 次の露頭で一杯足跡を見せられて納得した。そこは もう一面の足跡で 日本なら後生大事に網でも被せて 天然記念物「恐竜様の御足跡」○×教育委員会などと看板が立っているだろうが そんなごてではなく ただの露頭だ。ただし 道路の標識に *geologic interest* という表示がしてあり 露頭には地層名の入った粋な看板が立っているのはなかなかステキだ。手のあと足あとがざっくざっく出てくる。タイダルチャネルに沿って歩いた跡があり 「バンクで恐竜がずっこけてもがいた跡がある。」という説明に どの国にも見てきたような……を言う奴がいるんだなあ



第4図 恐竜の足跡（ダコタ層群 デンバー郊外）

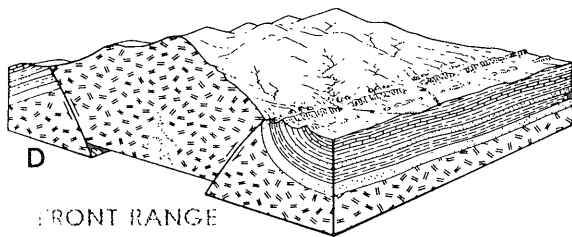


第6図 ダコタ層群（下部白亜系）の褶曲（デンバー郊外）

妙に感心した。

翌日は デンバー周辺の地質に関する巡検に出かけた。デンバー地域では 先カンブリア紀の変成岩・深成岩類を石炭系が不整合に覆い その上に順次第三系までが整合に重なる。ロッキー山脈東縁部に衝上（逆）断層があって 西側が上昇して先カンブリア系が露出している。東側は引きずられて褶曲し その結果 ロッキー山脈に沿って先カンブリア系から第三系までの地層が露出している。こうして前日の巡検の時に見たジュラ紀のモリソン層や白亜紀のダコダ層群が露出していた訳がかわった。日本ではいろいろと変動が重なりいろいろな岩石が露出しているのがあたり前で いちいちその岩石が露出している理由など考える習慣がない。地層が露出するという事の重大さへの認識は私にとって新鮮な驚きであった。

アメリカ中央部のように地層が水平に重なって その後も変動がなければ 地表には一番新しい地層しか露出しない。古い地層が露出すること自体が異常なことであって それは造山運動なのだ。この単純な断層に



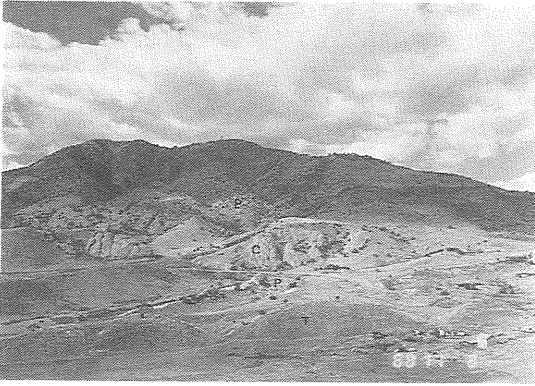
Mountains are not alike in form or origin. A, mountains formed by volcanic action; B, mountains resulting from folded layers of rock; C, mountains formed from fault blocks; D, mountains formed as a result of vertical uplift.

第5図 デンバーの地質構造（Denver's Geologic Setting USGS より）

よる変位が私とララミー変動との出会いである(第5図)。東部から西部へ向けて歩いてきて ロッキー山脈を見上げたときのアメリカ人の驚きは アメリカの地質学の発展の大きな動機づけとなり得たろうと想像される。ふりかえって 日本は日本ではどうだろう。造山帯の上において 造山運動について考えるとかできるだろうか？たとえできたとしても 驚きと疑問の大きさでかつてのアメリカ開拓者には叶わないような気がする。

デンバー地域ではこの褶曲の時期が 褶曲したあと堆積した地層やそれを覆う玄武岩溶岩の時代と褶曲している地層の時代から 第三紀の中頃と時代が決められている。実に科学的である。白亜紀のダコダ層群をもう一度歩いた。よく見ると地層が褶曲している（もちろん褶曲しているから露出しているのだが…）そのことにいたく感動してつい言ってしまった「アッ アメリカの地層が褶曲してる～……！」

地質の案内は実に優雅だ。「あちらに見えるのが先カンブリア系でございます。手前の赤いのが石炭系白い石が二疊系 手前が三疊系で今立っているのがジュラ系でございます。石炭系と 三疊系からは ×××の化石がでてます。……」説明されている岩石は所々に点々と少しずつ露出しているだけだ。私はすぐ浮んだ疑問について聞いてみた。「どうしてあのボンと出ている白い部分が二疊系だと言えるんです」と。案内者の答は簡単「石炭系と三疊系の間にあれば二疊系に決ってるじゃない」とアンボンタンの日本人をばかにするように鼻をひくひくさせている。当たり前のことである。そうかもしれないが 日頃日本で時代の異なる岩石がぐしゃぐしゃに出ている地層しか扱っていない者にとって 化石がなく露頭が欠如していることは致命的なのだ。デンバーではそんなゆがんだ見方をする者は一人もいない。実に大様だ。「いいなあ



第7図 デンバーの地質(デンバー郊外)

E: 先カンブリア C: 石炭系 P: 二畳系 T: 三畳系

爽やかだなあ なるほど 1と3の間は2か ふ〜む 真理だわい」と感心してつぶやいた。

帰り際 何枚もの準平原面について説明があったが ただボーッとした遠くの景色を見せるだけで ララミー 変動をいくつかのステージを解明したという案内者の説明はさっぱり面白くない。それよりも バスで隣あわせたおばさんの「あれが」パッファローよ。日本にはいないでしょ。ほら こっちが開拓を記念した建物よ。めずらしいでしょ」といった説明の方が楽しく案内者を無視して二人で談笑ばかりしていた。まるで高校時代の授業中みたいに。

そうこうするうち学会の講演の日程は終了し デンバーともお別れする時が来た。会話は別れの始まりというが 哀しいものである。「もっとバイキングで食べればよかった。折りに詰めて欲しかったよ〜…」と日本語で別れを告げると ホテルのフロントの人が「サンキューベリーマッチ」と握手してくれた。しかたがないので ニッコリと微笑んでチップを渡し post 巡検の地アリゾナに向けて出発した。

<アリゾナ>

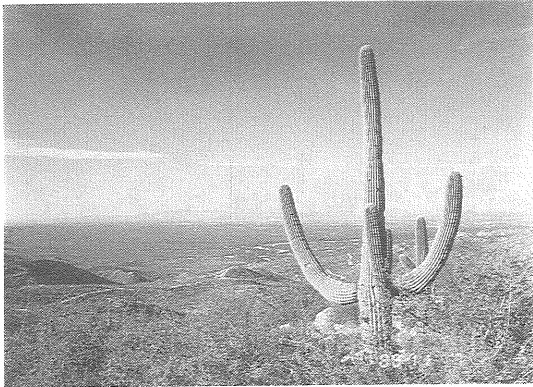
第3の巡検は3泊4日で行われた。飛行機の切符をうけとり ツーソンに集合した(Tusconをツーソンと呼べる人間は異常だ)。アリゾナはアメリカの南の端。メキシコももうすぐそこ。サボテンが生えていて 土はかーさかさ ほこりっぽい あっついし なにより露頭があるかしらん。飛行機から降りたつたとたんいろいろと心配になってきた。アメリカでモーター車なる所に泊るのとはじめてなら(きょう日本でも経験ありません) 知らない外人さんと同室なのとはじめて

だ。同室者は身のたけ8尺もあろうかという大男で頭はユルプリンナーそっくり。ただもう「ハハハジメマシテ 私ニッポンジン エイゴダメアルネ ヨロシク」というのが精一杯。彼の名はエリック・マウントジョイというカナダ人。もともとはフランス人で モンジョイというフランスによくある名らしいが こっちとアメリカさえ初めてなのに フランスのことまではよく知らない。先にオフロへどうぞと言うので お先に失礼して シャワーを浴びた。ところがシャワーの先が曲っていて バス室全体がびしょびしょになってしまった。「ゴメンネ!」といて 彼と交代した。翌日彼がお先にと言って バス室に入ったとたん 彼は「ウワー!」といてバスルームから飛び出てきた。彼は ユルプリンナー顔を桂枝雀風笑顔に変えて「やあ まいったまいった。You とおんなじや。シャワーの口を曲げたまま水を出してしもうた。ワリワリ」と言って びしょびしょのバスルームを見せてくれた。このように彼はとても気さくな人だった。

アリゾナの巡検は Basin and Range の南東部に当るツーソン付近でララミー変動主部(白亜紀-ジュラ紀)とその後の二つのステージの展張テクトニクスの変形構造を見るのが目的であった。参加者の大半の目的も同じである。

ところが案内者の U.S.G.S の H. Drewes 氏はアリゾナでは有名な地質学者で20人の地質者がいると19人は extension structure といい 彼一人 compression によるものだと言主張する人だ。はじめての meeting では 彼一人「皆さんに compression の構造をお見せできるのを楽しみにしています」といい 他の参加者は口々に extension の構造が見れるので楽しみにして来ましたという始末。なごやかにして しらけた雰囲気ただよう meeting であった。副案内者は私と同年代でアリゾナ地質調査所の S. J. Reynolds 氏である。日本からは 伊藤谷生(東大) 鎌田浩毅(地調) 両氏も参加した。

アリゾナの露頭は心配したとおり 日本が勝った!と思わせるもので 岩石がポツリポツリと露出している。最初の断層の露頭では「たしかこの辺なんだけどみんなで露頭をさがしてくれる?」との案内者の頼みで断層(thrust)を示す露頭探し。しかし見渡す限り露岩が見当たらない。みんなでうろうろして10分ほどしたとき 案内者が「オーイ ここだここだ」というので見てみると 70-80cm の石灰岩が1コ土ぼりの中に突出している。そして その1つの面を指して「ここが thrust 面だ。この石灰岩と thrust を境に接している岩石は向うのはしに出ている」という説明するではない



第8図 アリゾナの風景

か。ああなたということだとこの石灰岩をけとばしててと足を引きづりながら次の地点に向った。途中 岩石の時代・地層名の説明は全くない。また殆どの人がハンマーでたたいたり サンプルを取ったりしない。私一人あくせくと 写真を撮り 岩石を採り案内者に地層名や時代を聞いてメモを執る。こうしていろいろ撮り 採り 執りでついには参加者の列のトリ(最後尾)になってしまうのであった。

アリゾナは乾燥しているので サボテンが多い。これはわかる。「大きな木は少なく 一見 歩きやすそうだ。見渡す限りどこでも歩いて行けてしまう そんな感じた。field work は簡単でいいなあ。日本みたいに藪こぎもないし。」と思ったのは一時であった。山に入ると 小さい草木の1つ1つが生意気にトゲをもってこれが あっちをちくん こっちをちくん！いてっ逆らうとまたちくり 全く針の山である。半分ベソをかきながら周りを見ると アメリカ人はたくましい。平気で歩いているばかりでなく 老若男女皆半ズボンで歩いている。とくに足を鍛えている様子はなく血だらけ傷だらけにして歩いている。大丈夫なのかと聞くと そろって暑いよりましだと答える。わあ なんとという人たちが。とくに血だらけの女子学生が痛々しい。「大丈夫か」と聞くと 英語が通じなかった。彼女はパードンといって振り向こうとしたとたん山道を踏みはずして2m転落。こんどはこちらがパードン パードン・・・と連発して謝った。

しばらく歩いてあっちが衝上断層 こっちがナッペなどと 指差しつつ案内してくれる。もちょっとまじな説明ができないのかと思ってしばらくいくと やっと本当の断層に出会った。

第三紀の火山岩の上に断層で二畳紀の石灰岩が重なっている。案内者の顔にはこれこそ 衝上断層らしいだ

ろうと書いてある。しかし 彼は口に出してはそのことは言えなかった。少し手前の露頭で 先カンブリア紀の部層の上に二畳紀の石灰岩が載っていても衝上断層かと聞かれても 時代の前後関係だけでは衝上断層の証拠にはならないといばってみせたからである。

夜には meeting がある。今日一日の簡単なおさらいのあと 日本からきた(不勉強な)お客様のためにと北米の地質構造発達史について説明してくれることになった。先カンブリア紀から順序よく説明してくれるのだが 白亜紀—第三紀のララミー変動付近になると説明というより議論となってしまった。興奮して早口になり 頭も耳も悪いお客のことなどすっかり忘れてしまうのである。明日の野外巡検のために早く寝ようなどと安易な切り上げかたはせず 11時過ぎまで議論は続いた。わからなかった部分は部屋に戻って 同室のエリックに尋ねた。彼は親切に図を描き説明してくれた。私が納得して寝ついたのは真夜中を過ぎていた。

こうしてアリゾナ巡検の第1日目が終わった。

翌朝は ツーソンの東方のドラゴン山地へ向った。広大な平野を作った河川の大きさに感嘆しながら 車は Basin and Range の構造に直交してゆく。リンコン山地の detachment fault の様子をツーソン郊外から概観する。

途中 Texas Canyon という所で花崗岩 (Paleocene and Eocene 2-mica granite) の作る奇観を眺めたあとドラゴン山脈のふもとで車をおりる。とことこと谷を歩いてゆくと アリゾナ特有のサボテンやトゲトゲの草を主体とする殺風景から 次第に日本に似た植生の風景となってゆく。山の奥深い所の谷間にはやはり水が多いらしい。なんとなくホッとする。

どンドン山を登ってゆく 歩いてても歩いてても足もとはず〜と 下部白亜紀の Bisbee 層群の砂岩泥岩互層や礫岩である。結構きつい登りである。この巡検には女性も多く 海洋学者など日頃山登りとは縁のない人もいる。野外地質屋としてはへこたれるわけにはいかないのだが 何故か皆から遅れてしまう。初めのうちは私が露頭を詳しく観察しすぎるからだと思っていたがただひたすら歩く所では更に遅れてしまう。「ハイチーズ！」と並んで写真を撮ってみて初めて分った。彼らは私のおへそくらいまで足が切れ込んでいるのだ。歩幅を足の回転数でカバーする 涙ぐましい努力は最終日まで続いた。

さほど暑くもないのにやたらと喉が渇く。背中リュックの中は水をたっぷり入れたポリタンクで一杯だ。何度も何度も取り出しては 一口ぐびり 二口ぐびりとやる。露頭や景色を眺める時間よりまっ白なボ



第9図 カンブリア紀の珪岩（ドラゴン山脈 アリゾナ）

リタンクを眺めている時間の方が多くなる。

頂上へ着いて説明がはじまった。今まで歩いてきた下部白亜系の Bisbee 層群は ナップの上盤側で 下盤側は向こうに見える山々に分布する古生層ですという説明の どう見てもその“下盤側”がはるかに高い所に位置している。腑に落ちない人々は 案内者とは別の所に集まって 正しい地質の解釈はこうだあだだと議論しはじめた。そのうちの一人が 日本の客人に こう考えると理解しやすいと 主案内者とは全くちがった解釈を示してくれた。主案内者ばかりの意見を聞くと 頭の中が混乱してくるので これからはいろいろな人の意見を聞こうと心に決めた。

谷を隔てて 向こうに見える山々(“下盤側”)は 先カンブリア紀の千枚岩が断層を挟んで古生層と接している。古生層は先カンブリア紀の珪岩 (Bolsa Quartzite) 泥岩 砂岩 石灰岩 デボン紀の石灰岩 二疊紀の石灰岩とからなり これらの一連の地層が断層で繰り返している。珪岩の部分は風化に強く突出しているのだから遠くから見てもはっきりとよくわかる (第9図)。山頂での説明のあと山を下ってこれら“下盤側”の地層を見に行く。これがなんと非常に tight な褶曲をしている。

とくに石炭紀-二疊紀の石灰岩は みごとに 褶曲しており中に入っている化石もかなり変形している。変形ばかりではなく 若干変成しており石灰岩は大理石化している。主案内者は 堆積物の過重による変成だと説明

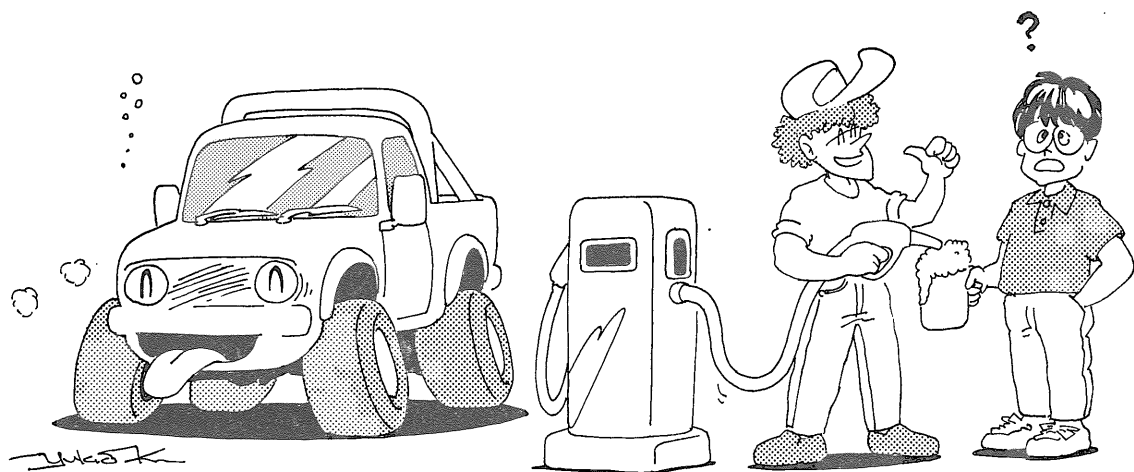
したが 先ほどのこともあるので 副案内者に確認したところ ララミー変動時の圧縮場で形成されたものだという事だ。この辺一帯の地層と同種の地層は グランドキャニオンを構成している岩相とほぼ類似しており グランドキャニオンでは変成していないので 過重だけのせいにするとはできないといわれ納得。変成の原因はともかく 変成・変形した岩石・地層と同種のものが本来の姿で近接して露出しているという話自体にとっても感心した。構造変形を論じる場合の“根”があることが 議論をいかにしっかりしたものにするかということ この後いろいろな場面で味わった。とてもうらやましいことである。

下盤側の岩石を一通り観察して 峠に登り 車を降りた地点へ戻ってきた。みんなジュースに群がって ガボガボ飲み出した。私もコーラを「ああ おいしい」と一気に2本飲み干して ラベルの“ダイエット”ヨークという文字をつくづく眺めた。これで今日5日目。痩せるわけがない。なかなかのブラックユーモアである。

2日目の夜は自由行動。シャワーの方向に気をつけてサッパリしたあと 夜中にビールが飲みたくなった。

もうすっかりアメリカ慣れた私は モーターを抜け出して ビールを買いに行くことにした。フロントで「この近くでビールを売ってない？」と聞くと「このモーターの隣のガソリンスタンドのすぐ向こうで売っているよ」と親切に教えてくれた。私はそれと 駆け出したが この隣のガソリンスタンドとやらがやたらと遠い。しかも一軒だけポツンと立っている。そのまた向こうはなにもない。

「ハハア さすがになんでもビッグなアメリカだなあ。この大きな道路をへだててはるか向こうにポツリと小さな明かりが見える。きっとあれのことを すぐ向こうだといっているのだな。う〜む。さすがアメリカだ」と感心しながら しかし チョッピリこわいの



で息を切らせて走ってゆくと この小さな明かりが次第に大きくなって エッソというマークに見えてくる。「またガソリンスタンドじゃないか、困ったなあ、フロントの人 間違えてこのガソリンスタンドの向こうのことを言ったのかな、この向こうにも何も見えないけどなあ、あ〜あ モーターがあんなに小さくなっちゃった、もうビールはいいや 帰ろう。」ととぼとぼ歩いて戻ってくると モーターの隣のガソリンスタンドからビールを抱えて出てくる人がいる。よくみるとガソリンスタンドの中でビールや雑貨をたくさん売っている。「なあんだ、すぐ向こうは スタンドの中のことか、ハハハ、英語は正しく使ってほしいなあ」と文句をいいながらやっとありつけたビールを大事に抱えて帰った。正しく英語を理解していなかったのはいうまでもなく この私の方だったのだけれど……。

アリゾナ巡検最終日、この日は午前中 ツーソン東部リコン山脈へ行く。歩きはじめて まず見たのが先カンブリア紀の花崗閃緑岩。しばらく小高い丘を登って行くと この花崗閃緑岩の上に低角の断層を境として 二疊紀のホーキョ石灰岩 (Horquilla Limestone) が重なっている。この石灰岩が非常に tight な褶曲をしていて 北東方向へ上盤側が動いたことを示している。このあと 古生代の珪岩・石灰岩 中生代の砂岩・泥岩を見たがいずれも非常によく褶曲している。この頃になると「アメリカの地層は変形してないのだ」という偏見は頭からすっかり消えてしまっていた。

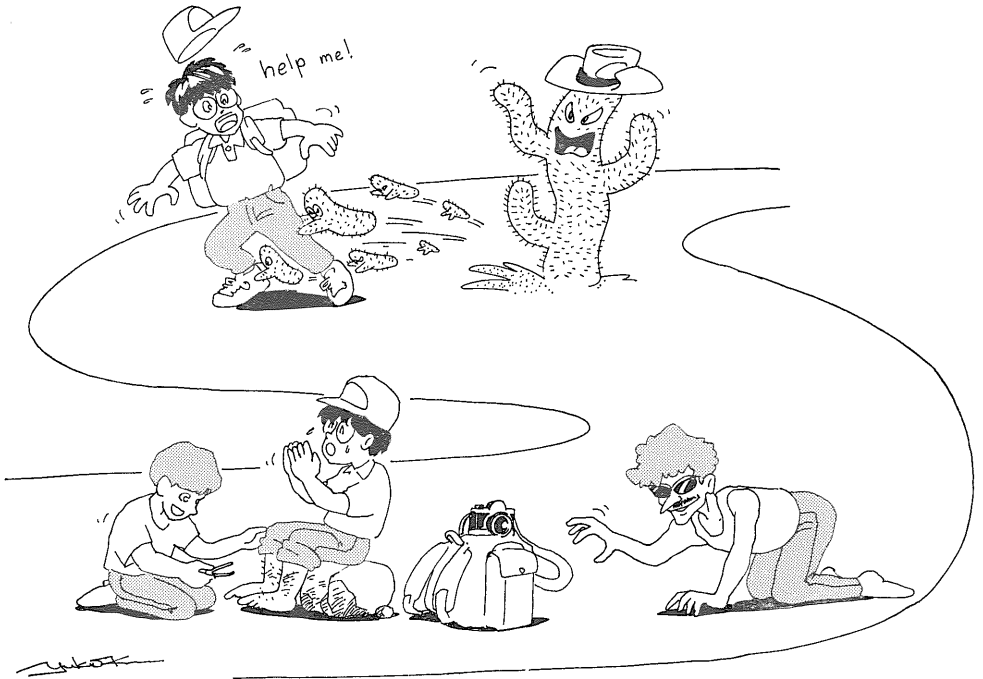
午後には Sabnaro National Monument という大きな国立公園へ行く。最後に観光地の露頭に行くなんて心にくい演出である。ここでは マイロナイトからマイクロプレッチャまでいろいろな段階の detachment fault の様子を観察できる。「マイロナイトの原岩は

？」と尋ねたら 「先カンブリア紀と第三紀の花崗岩類は区別できない」との返事だ。ぐしゃぐしゃになったマイロナイトを見ていると 自然は偉大な錬金術師だなあと思う。

この公園は美しいサボテンが沢山林立していてとても景色のよい所だ。最後の露頭まで青空の下をテクテクと歩いた。ところが 美しいものにはトゲがあるという真実をすっかり忘れていて大失敗をやらかしてしまった。ここのサボテンは 自分の分身をボンと飛ばす習性があるらしく 足元にはサボテンのお子様たちが沢山散らばっている。それを知らずに蹴飛ばして歩いたのであろう。気がついた時には 両足とくに靴のまわりはトゲだらけになり 私は歩くサボテンと化していた。近くを歩いていた数人の巡検参加者が かがんで足や靴の先に刺さったとげを一本一本 トゲ抜きで (アリゾナにはトゲ抜きが必要不可欠です) 抜いてくれた。一本一本しっかり食込んでおり 数十本のとげを抜くの30



第10図 下部白亜系 Bisbee 層群の褶曲 (リコン山脈 アリゾナ)

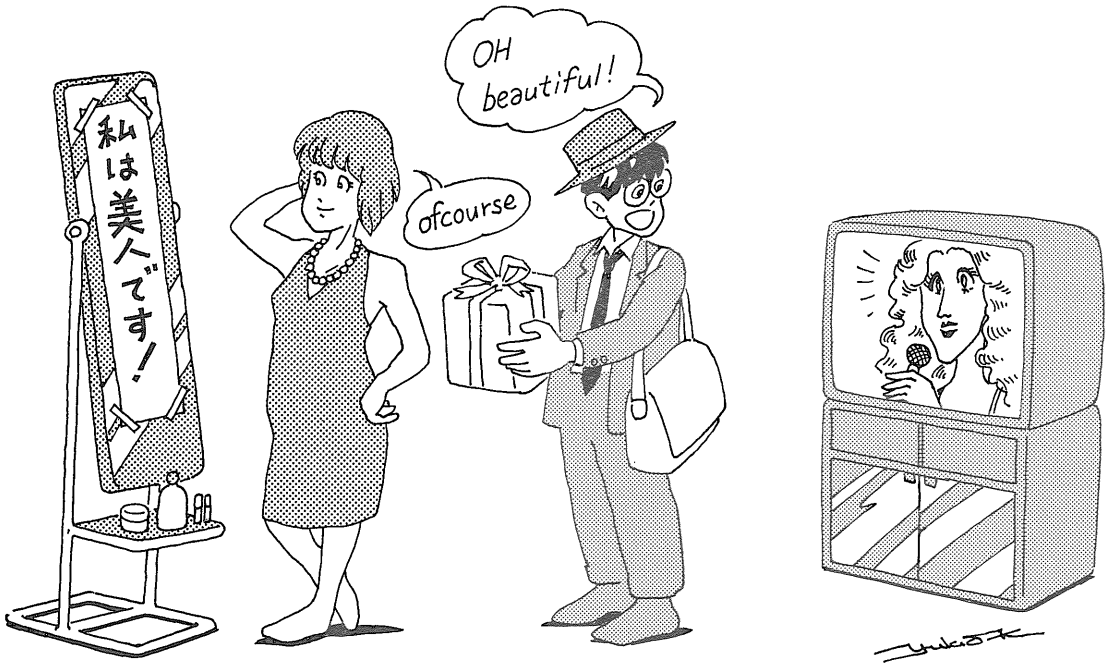


分以上もかかってしまった。途中何度も「もういいですよ 次の露頭に遅れますから」といったのだが「このまま歩いたらまたどこか足を傷つけるから 全部抜くまで動くな」という。私は嬉しくて有難くて涙が出そうだったが 実は恐縮して涙ではなく冷や汗ばかりが出ていた。私は この30分の感激を一生忘れないぞと心に誓い そして もう二度とみんなに迷惑をかけるまいと決心した。たぶん 前者の誓いは守ることができようが 後者の決心は10分後にみごとにくつがえってしまった。

サボテン足事件で すっかり気が動転した私は 皆がもう最後の露頭を離れようという時にカメラをなくしてしまったのに気づいた。近くのアリゾナ大学の学生にこっそり アノネ…と言ったのだが あっという間に大声で皆に伝わり みんなで手わけして探してくれた。帰りの飛行機の出発時刻が迫っている人もいるのにどうしようとは私はあせるは困るは トホホホホ。最後までドジをやってしまった。もうみんなにあきらめました帰らましょ！と言おうと心の中で後悔の雨をふらせ エート あきらめるって英語で何だっけなあ？と考えているうちに 向こうの方でお〜い あったぞと呼んでいる。「ああ よかった」見つかったことより みんなにこれ以上迷惑をかけずにすんだことにとっても安心した。「トゲとドジ」英語でなんて言うんだろう？ でも1つだけ体で憶えた単語がある。S-H-A-M-E！
車に戻ってたくさん余ったコーラやジュースで乾杯す

ると もう巡検はおしまい。そして私の旅も少しずつ幕が降りかかる。この日は ツーソン泊なので 副案内者の Steve や 翌日の飛行機で帰る数人で 夜はメキシカンレストランへいった。車で ツーソンの街をぐるぐるっとまわって メキシコ人の沢山住んでいる地区へ入ってゆく。アリゾナはメキシコに近く 沢山メキシコ人が住んでいる。私がメキシコ料理は初めてだといったのでいろいろと説明してくれた。ふむふむあれも食べたい これも食べたいと思い 沢山注文してしまった。皆で注文したものを交換しあって楽しく食べた 飲んだ 話した 笑った。こんな楽しい夜はない！誰だアメリカが怖いといったのは！だれだ水戸黄門の方が安心だといったのは！…ほろ酔いかげんで おいくら？と聞いたら返事は巨泉の声だった。「さあ このメキシコ料理一式の値段を当てていただきます。ハウマッチ？ 1ペソは0.06円です！」……

翌朝ツーソンからロサンゼルス ロサンゼルスから成田へと飛行機は飛んだ。ロサンゼルスでは みやげもの屋で 目を血走らせて買物をした。「一人で旅行をしていい気なもんだワ」とつぶやいているであろう山の神の顔が目に浮かぶ。まず 10日分の償いを みやげもので…と 駆けずり回ってすっかり疲れ果てた。ロスを飛立つとすぐ眼を閉じた。ぐっすり眠って目を覚ましたらもう成田に着いていた。税関をすぎ荷物を受取るとそこはまぎれもなく日本国内であった。あっ



さりしすぎている。「あのう 私はアメリカに初めて行って来たんですけど…ねえ アメリカですよ! 悪い病気や変な本を持ってきていないかとか もっといろいろ調べていただけないでしょうか?」と思いつつ ぶりかえるが 係員は沢山の人々を淡々と事務的に処理している。いかにも軽い。私は何万人もの海外旅行者のうちの単なる一匹のアリコ旅行者。彼らにとっては私などつまらない存在なのだろう。でも私にとってこのアメリカの旅は 新鮮さと暖かさと驚きに満ち 充分重みのあるものであった。

<エピローグ>

アメリカから帰ってきて いろいろな人々に感想を求められた。

所長や部長には「まじめに勉強してきたので すっかり人格が変わりました」と答えて信じてもらえなかった。

同僚には「アメリカの地層は なったんと褶曲しているんだ」と興奮して話をして「あたりまえだろ。おまえ 何しにいつて来たんや」と相手にしてもらえなかった。

アメリカは怖いぞ〜!と教えてくれた友人には「確かに怖かったぜ。君みたいな嘘つきが一杯いたからな!」と皮肉を言っても通じなかった。

子供たちには「お父さんは英語を話したんだよ。こ

んにちはマックさんは ハロー!マックというんだよ」と教えたために おもちゃ屋のハローマックでオモチャをたんと買わされた。

そして私の奥さんには「いやぁ アメリカに行っても君ほど美しい女性はいなかったよ」と言って「ア・タ・リ・マ・エでしょ!」と聞き直られた。神様罪深い嘘つきの私をどうぞお許しください。アーメン。

<アペンディックス>

さて 最後はクイズです。

この話の中にはあまり講演内容が出て来ません。その理由は次のうちどれでしょう (答えはこのページの下にあります)。

- ①話が面白くなるから割愛した
- ②講演会場だと思って座った場所が実は映画館だった
- ③会場ではふむふむとうなずいていたが 英語だったので全く理解できていなかった。
- ④アメリカは怖そうだったので 実はアメリカに行ったふりをして 日本でこの文章を書いていた。
- ⑤月報に別途 投稿中である。

i.....274

なかに宗平:4のなや蜜のなやや2 1.2① (そま)